

直島への手紙 第三信

前略 大岸 様

9月後半になり、ようやく日中の暑さが和らぐ日が出てきましたが、まだ暑い日が続いています。直島はいかがでしょうか。地域総合調査で一緒にさせていただき、各島を巡り歩いていた時には、この時期、日差しはやや強くても、島の浜や丘の上を歩いていると、海を渡る風で涼しさを感じられていました。

さて、現在の直島は、言うまでもなく瀬戸内海に浮かぶ群島で、現在は相互の移動は船舶が不可欠ですが、かつての直島群島は、陸路で行き来が可能でした。

時期は後期旧石器時代と呼ばれる時代で、氷河期の真っ只中でした。現在確認されている最後の氷河期の最も寒かった時期は、約 20,000 年前とされています。高緯度地域や標高の高い陸地に氷床が発達することによって、海水面は現在よりも約 120m下がっていました。その結果、現在の海底 120mよりも浅い部分が陸地化し、本州・九州・四国は地続きになっていました。もちろん、瀬戸内海には海水はありませんでしたし、それどころか、現在は近海の太平洋や日本海に浮かぶ島が陸続きになっていたところもあります。当時の瀬戸内周辺の植生は、冷温帯落葉広葉樹林で現在の北海道平野部に近いものだったようです。四国山地や中国山地の標高の高い部分は、現在の日本アルプスなどの植生と同じ亜寒帯針葉樹林でした。ですので、この界隈は現在の北海道の平野部の気候に似たものだったと言えます。

さて、そのような環境下で、今の直島周辺の地形を考えてみます。当時の地形は、瀬戸内海の形成後に陸地から流入して堆積した土砂により埋没し、さらに、その後の潮流等により浸食され、当時の地形そのままが残っているとは考えにくいですが、現在の海底地形（写真1）を参考にすることが出来ます。これをみると、入り組んだ丘（現在の島の部分と薄

い水色の部分）がその間を流れる河川や湖沼（青の濃い部分）によって、いくつかの単位に分かれていたと考えられます。薄い水色の部分は、等高線の間隔がやや広いことから、勾配のゆるい地形であることが伺えます。現在漁場となる「瀬」もそのような地形の一部のようです。

一方、遺跡の分布をみると、旧石器時代の資料が見つかるのは、多くが島の比較的小高い丘の上です。これは、さまざまな分布調査の他、瀬戸大橋の掛かる備讃瀬戸の島々で行われた発掘調査からも良くわかります。

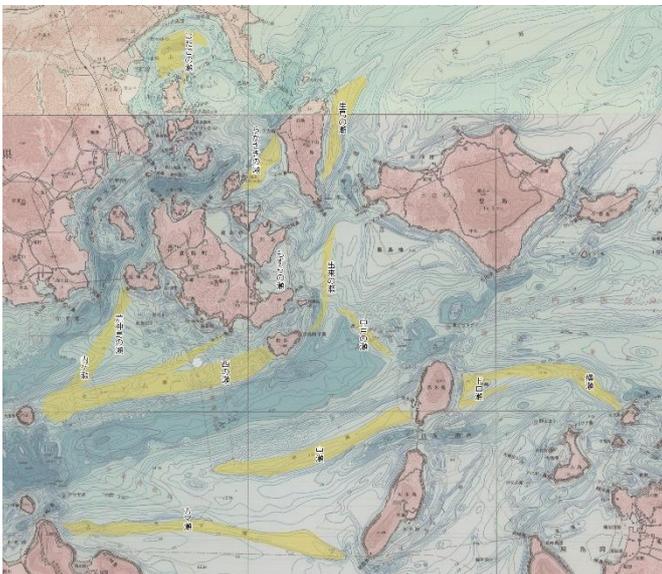
丘の尾根筋の傾斜のゆるい場所では、現在でも地表に遺物が散らばっていることが確認できます（写真2）。そこには、道具のかたちに加工作された石器のほか、石器を作る材料となる打ち欠いたかけらや、その元になる石の塊、石器のかたちを整える際に生じる小さな石くずが見られます。そのことから、そこで石器づくりが行われていたことがわかります。中には火を受けた痕跡を持つものも確認できることから、想像をたくましくすると、眺望の良い丘の上にキャンプを張り、火を焚き、狩りの道具を整えながら、眼下に広がる平原を見下ろして狩りの獲物となる動物を探し、同時に食べられる根茎や木の実などの採取について、計画していたのかもしれない。

その後、最寒冷期を過ぎ、後氷期へと移る過程で温暖化した気候により、高緯度地帯の氷床は溶け、海水面の上昇に伴い、瀬戸内地域に海水の流入が始まります。縄文時代早期の終わり頃（約8,000年前）には瀬戸内海が形成され、本州と四国が分断されます。その過程で、瀬戸内地方の漁労活動は内水面のみならず海面にその範囲を広げます。

陸上での狩猟・採集活動を調べていると、直島での漁労活動にも興味が出てきました。また分かったことをお知らせしますね。

早々

展示担当 小野 秀幸 拝



出典：海上保安庁刊行海底地形図 備讃瀬戸東部、備讃瀬戸西部、播磨瀬戸北西部を加工して作成

写真1 直島周辺の海底地形と現在の漁場（黄色部）



写真2 荒神島西丘陵遺跡からの眺望（黄色枠内は露出した石器 右枠は部分拡大）石器などを含む層が流出し、辛うじて資料が残存している。左上は大槌島